

■（１３８）新聞協会賞で区切りにはできない ―― 原発事故報道

今年１月に小欄で取り上げた「手抜き除染」の記事が、日本新聞協会賞を受賞した。福島第一原発事故で放出された放射性物質を取り除く作業の実態を、長期にわたって張り込んだ記者たちが、ビデオや写真で記録して告発した特ダネ記事だった。

現場を見て、どんな問題意識を持つか。記者の力の差が歴然と出る瞬間だ。

４９年前の９月に伊勢湾台風が東海地方を襲った。甚大な被害で、当時の高潮の高さが今も東京湾の防潮堤の基準になっているほどだ。その被災地をへりから取材した記者がいた。大先輩の疋田桂一郎氏だ。被災現場が、彼の目にはまだら模様に映った。浸水した地と難を逃れた地。前者は工場労働者たちの住まい、後者は工場や、管理職らの高級住宅地だった。災害現場から浮かび上がる「社会の格差」を訴えた記事は、後世に語り継がれるルポルタージュとなった。日ごろから問題意識を持っていたからこそ、奥深い記事になったとされる。

原発事故は現在、「除染」どころか、さらなる「汚染」でいっそう深刻化している。受賞で区切りはつかない。報道に携わる記者は、まだまだ監視を続けなければならない（山）